

イスラム暦と年中行事覚書

吉 田 光 邦

イスラムの暦法に関しては、すでに鏡島寛之氏によって“回教暦の構成と用法”が、“回教圏”第8巻(昭.19)に詳細に述べられており、現用イスラム暦に関する限りその内容はあらためて述べる要はないようである。また現行イスラム暦や、それ以前の暦、或いは西アジア一般についての暦の歴史は、前山仁郎氏によって“諸民族の暦、(新天文学講座Ⅺ, 恒星社, 昭.33)にまとめられている。さらにこれらの暦を生んだ基礎的な天文観測の機構に関しては、藪内清博士, “イスラムの天文台と観測機械”(文明の十字路, 平凡社, 昭.37)によって、やはり詳しく論ぜられている。

したがってイスラム暦の内容、その他については今こと新しく説明することはないであろう。ただイスラム圏においては、現在は日用暦として太陽暦、宗教暦としてイスラム暦を併用していることを注意すれば足りよう。紀元はヘジラで数えるが、太陽暦の場合はヘジラ紀元といっても、それは(西暦紀元年-621年)としたものであり、宗教暦でいうヘジラ紀元とは数字をことにしている。また暦日は必ず夕方から夕方までで数えるのであって、この点はユダヤ暦においても、今日実行されていることである。次に西暦紀元とヘジラ紀元の換算式を示しておこう。

$$A.D = \frac{32}{33} A.H + 622,$$

$$A.H = \frac{33}{32} (A.D - 622)$$

もちろんこれは略算であって正確なものではない。さらにイスラム圏への旅行者が最も困難を感じるのはラマザン(断食節)の存在である。そこでラマザン月を知るためには、月日までの換算が必要となってくる。しかしこれも正確に換算するには、少々めんどろな手続がいる。そこでごく大略の年初の対照を示しておく。しかしこれにも1, 2日の出入は当然考えられる。ラマザンは、この年初の日から、+240日、或いは-120日が、ラマザン入りの祭日となる。

イスラム暦	グレゴリオ暦
1378年 1 月 1 日	1958年 7 月 17 日
79 "	59 7 6
80 "	60 6 25
81 "	61 6 14
82 "	62 6 3

83	”	63	5	23
84	”	64	5	12
85	”	65	5	1
86	”	66	4	19

さて以上のイスラム暦のほかに古イラン暦といわれるゾロアスター暦が、今もゾロアスターの一部については行われていることも注意しておこう。これは純粹の太陽暦であって、火を聖とする彼等の習俗と相合致するものである。この暦の内容については、Browne, E. G. “A Year amongst the Persians” (1st ed. 1893) の第13章 Yezd の項に詳しいが、ここではそれについては記さない。

次にイスラム教徒の祭日が問題となる。そのうち最も重視されるのは、ラマザン、即ちイスラム暦9月の30日間にわたる断食行である。この月は教祖マホメットが最初の天啓を受けた、最も神聖な月であるから、全信徒が精進の生活をおくるわけである。その間は、日出から日没まで厳に飲食を絶つ。この断食節の明けるのは10月の第1日。この日は開齋の祭として、特別の礼拝が行われ、3日間は開齋を祝って盛んに飲食、饗応が行われる。

こうしたラマザンの時の状況について、1920年にトルキスタンを旅行した、グスタフ・クリストは次のように記している。

“ラマザンは回教徒の一個月間の断食であって、トルキスタンに住むすべての非回教徒には悪夢である。恐らくその起源は宗教的及び衛生的觀念から發したものであろう。しかし数世紀を経るに従って、それは回教の儀式の根深い特質となった。共產主義の教義もこれを廃止する力はなかった。官憲さへも断食中官庁を閉じる。そして唯軍隊のみはそれを無視することができる。昔日はすべての戦闘もラマザン中は停止した。1918年の夏まで、アミルは彼の兵隊が唯夜のみしか戦うことができないので、断食中は休戦に同意するようロシア人に要求する特使を派遣したものである。

断食の月中真の回教徒は日出より日没まで飲食してはならない。彼は沐浴することも薬を用いることさへしてはならない。彼は花をかぎ、或は巻煙草を吸うことさへも許されない。というのはどんなものでも身体に入れることは許されないからである。回教徒の断食は欧州人の断食とは似ても似つかない。それは単に肉食を断ち、或は日常の飲食物に些細の変化をするというのではなくして、日中完全にして徹底的な禁欲を強いるのである。トルキスタンの灼熱の暑季に水を禁止することは特に苛酷である。しかしながら、陽が没するや否や、無暗に飲食が始まって、費消される食物の量はほとんど信じられないほどである。声楽、舞踊及音楽は夜通しつづく、そして花火が打ちあげられる。夜明け頃ラマザンの太鼓が市街に鳴りひびくと乱飲乱舞はその頂点に達す。というのは皆が急いで持ちこたえるだけ多くつめこみ、来る一日を一層能く耐えんとするからである。自然食料品店はすべて日中閉鎖されている。ウズベクもサル

トも誰ひとりとして陽のさしている間、食物を料理もしなければ、手にふれもしない。”（外務省文化事業部、昭和14年訳本による）

これはいうまでもなく1920年のソ連領トルキスタンにおける、ラマザンの観察である。そしてこの状況は今日においても、全く変わっていない。

ラマザンにならんで重要なのは、イスラム暦12月の10日から13日に至るクルバンである。これはイブラヒムがその子をアラーに捧げようとした献身の故事にもとずいてなされるもので、羊を殺して貧者にほどこすなどの行事がある。

そのほかのイスラム暦の祭日には、1月10日のアシュラ、3月12日のマホメット生誕（マウルード）、7月27日のマホメット昇天（ミラージ）、12月7～10日のハジ（巡礼）の日があるが、いずれも熱心な礼拝とか小宴を伴うにすぎないのであり、一般にイスラム社会は割に祭儀がすくないということができよう。

こうしたイスラム暦を中心とした年間の諸行事はしばしばイスラム圏を訪れた旅行者によって注意されている。たとえば名高い明の鄭和の7次にわたる大遠征は、いくつかの貴重な南海に関する記録をのこしたが、そのひとつ、費信の星槎勝覧には天方国の項に次のように記している。

“古エ、礼拝寺ヲ置ク、月ノ初メテ生ズルヲ見テ、其酋長及ビ民下、悉皆天ヲ拝シ、以テ一国之化ヲナス”

天方国とはメッカのことである。同じく鞏珍の西洋番国志では、

“爪哇国……毎歳十月ヲ以テ春首トナス、竹槍会アリ、……”

阿丹国、……月日ハ之レ閏月ヲ定ムル無シ、但十二月ヲ以テ一年トナス、月之大小ハ但今夜ヲ以テ新月見ユレバ、明日ハ即チ月ノ一也、四季ハ定マラズ、陰陽ヲ推算スルノ人有リテヨリ、某日ヲ春首トナス、則チ花草開栄、某日ハ是レ初秋、則チ木葉凋脱、日月交蝕、風雨潮信ニ至ルモ准ゼザルナシ……

天方国……毎年十二月十日、諸番ノ回回、一二年ノ遠路ヲ行ク者、寺ニ到リテ礼拝ス、去ルニ及ンデ、往々皂蓋少許ヲ割リテ記トナス……

などと記されている。爪哇はジャワ、阿丹はアデンのことである。中国にはすでにイスラム教徒の多く居住するあり、その生活ぶりは知られていたにしても、やはり現実のイスラム世界は注目をあつめたのであろう。

下って日本の明治13年7月20日、ロシアのペテルスブルグを発した西徳二郎は、ブハラ、サマルカンド方面を旅行して、14年4月に東京に帰来した。彼の記録“中亜細亜紀事”には次のような記載がある。

“曆ハマホメット宗ノ陰陽ヲ用ヒ、三百五十四日、或ハ三百五十五日ヲ一年トシテ、之ヲ十二ヶ月ニ分ツ、二十九日或ハ三十日ヲ以テ一ヶ月トシ、新月ヲ以テ月ノ始メトス、新年ハ草木

発芽ノ時ニシテ、凡ソ陽暦ノ三月ニ当ル……

各地方歳ニ三大祭アリ、其中歳末ニ在ル者ヲ以テ最モ重シトス、此祭時三週間ハ日中食セズ、嚴ニ齋戒ヲ持シ、經ヲ誦シ礼拝最モ謹ム、其間或ハ平日崇寢ノ陵廟ニ詣リ、頸項ノ皮膚ヲ刺シ、体ニ血ヲ流ガシテ神靈ヲ祭ル者アリ、之ヲウスルト称ス、其外毎週金曜日ヲデウマト称シ、祭日トス、毎日五回ノ拝礼ヲ行フ、之ヲナマズト称ス、其中日没ノ時ニ行フ者ヲ以テ重シトス、通例ノ人多クハ此一度ニ限ル、……

西の觀察はなかなか詳密である。彼はまたいう、‘学者ハ常ニ其思慮ヲマホメット宗教ノ範圍内ニ画シテ、其外ニ及ボス事アタハズ、故ニマタ他ノ工夫ヲ用ヒザルコト、儒教ヨリモ甚シ、ケダシムスルマン人民開進ノ妨碍、一ニ此ニ在リ’、こうした問題は今日でもなおイスラム世界の近代化における重要な問題として残されている。

そのほかイスラムがスンニとシーアの2派に大別されることは、周知の事実である。スンニというまでもなく教祖マホメット以来の正統カリフによって統率される宗派であるが、シーアは正統カリフ3人をみとめず、4代目の教祖の娘ファティマの婿アリー以下の子孫を正統とする。いわばスンニは法統であり、シーアは血統である。

しかし今日のイスラムは、その大部分がスンニであり、シーアはイランにおいてのみ栄え、他地においてはきわめて少ない。またサウジ・アラビアにはワハビ派があるけれども、この勢力はさらに小さい。

シーアは上述の祭日のほかに、モハラムなる10日間の祭をもつ。これはアリーの2子、フセイン、ハサンの受難を追悼するもので、モハラム、即わちイスラム暦1月の1日から10日までが中心であるが、事實は1月中はほとんど歌舞音曲までも停止して、厳格に追悼の意を表している。

このモハラムの祭について、さきにひいたクリストは、イランのメシエドにおけるものを、やはり次のように記している。

‘メシエドに居住せる大概の欧州人は、万一の衝突をさけるため、少くとも10日間はずとめて不在するよう注意した。その衝突は外国領事館にもペルシャ当局にも歓迎せられなかった。たった1年前(1924年7月)、米国領事メージャー、ロバート・イムブリーは、自由に通行しうる道路で、モハラムの行列を撮っているところを、頑迷なシーア派信者に見つけられ、投石せられて文字通り寸断せられた。……モハラムは主としてフセイン及び従として予言者マホメットの孫ハサンの追悼会である。そしてシーア教徒のいる処は、どこでも記念祭は非常に荘嚴に挙行せられる。10日目は全儀式の中で最も行事の多い感銘の深い日である。……’

常例の巡回行列、及び今年は幾分静に事もなくすんだ模擬戦闘の後、約200人の剃髪した男達は、白いズボン、白い長いシャツを着て各々手に鋭利な短刀を持ち、開豁な広場に現われた。彼等が現われた時、無数の大群衆はこぞって狂乱し、フセインを連呼しはじめた。その男

たちは2人ずつ向きあって、陶然たる音楽に合わせて彼等の素足は地面をふみつける。ついに彼等はすぐ塵埃にとりまかれてしまった。間もなく彼等は彼等の短刀で互に切合をはじめた。彼等の白い衣服が血でずぶぬれになるまで、頭や腕に傷を負わせた。怪奇な跳躍をして「ああフセイン、ああフセイン」を叫びながら広場をはねまわった。各自は他の顔をのぞきこんで、彼が負わせた傷を見ることができた。他人の血は彼の哀情をそそり、怒号はたちまち悲痛の呻吟に衰えた。血のりの溜りが地上にできた。そして甘いはき気が血の香と灼くが如き炎熱と混交して余が現実には病気であったほど胸悪く感じさせた。幸にも余は英国人経営の旅館の上に巧妙にかくれていたもので、頑迷な暴徒によって発見せられなかった。

出血した者の多数が人事不省で地に倒れた。そしてはねまわる熱狂の残余は彼等の短刀をもって倒れている者を打った。ついに若干の巡査が咆哮する群衆をおしのけて、犠牲者を抱きあげて連れ去った。大に勇敢な他の巡査の一隊は、まさに絶息せんとするばかりに、非常にひどい傷を負うた若干の者を、完全に寸断せられない内に退去せよと説得していた。

この宗教的熱狂は、余らの大いに嫌悪する処である。しかしシーア派教徒には、最高の賞讃を博する無比の神聖なる行為である。こうして身を寸断せられたものは一彼らがこの世でどんな罪を犯したことがあっても一彼等が死ぬるとすぐ極楽に迎えられる確実性を得たのである。傍観者さへもコーラン違反のすべての罪障が消滅したのである。

この虐殺的一幕が終ったとき、腰まで露出した新手の男の一群が近づいてきた。これらの者もまたフセインを叫び、そして握った拳固で大きな響をたてて彼の胸を打ちはじめた。彼らの胸部はすぐ傷痕がつき、ふくれ上った。そして内出血で赤くなっていた。それから唇から泡がとびでるほど、彼等の頭を急にぐいと投げ出して、支離滅裂な舞踊をはじめた。そして次から次に地面に倒れて、彼らの前任者らが残した血のにじんだ塵の上を転々していた。このあとで、アリの墓を表徴する覆蓋のある大きな幡が、広場を担がれて通った。そしてその日の儀式は終わったのである。”（同上訳による）

こうしたモハラムの熱狂的な風景は今も変わっていない。筆者も1956年、59年の2回の西アジアの旅において、ともにモハラムの様子を実見した。モハラムが近づくや、町のあちこちの広場には黒色のテントが張られ、黒い弔旗で飾られる。シーア派の聖地であるイランのクーム、メシエドなどからは各地に向けて説教師の大群が出発する。そして夜ごと夜ごとに、用意されたテントのなかで熱弁をふるい悲壮なるフセイン、ハサンの最後を語りつづける。喪服をつけた信徒たちは、ぎっしりとテントを埋めて、その説教に聞き入り感動のあまり号泣の声さえ聞かれるのである。

一方毎日、モスクへの男たちの行進がくりかえされる。男たちはことごとく黒衣をつけて、左の胸を開き右の手の拳で胸を打ちながら行進するのである。同時に哀調を帯びた悼歌がうたわれ、或いはたえずフセイン、ハサンと連呼する。ことにこの行列がバザールのなかを通ると

きは、胸を打つひびきがバザールの内に反響して、一種異様なすさまじいまでの雰囲気をつたえる。婦人たちは道の両側に立ってこの行列を見送り、なかには感動のすえ声をあげて泣く人もある。

男たちの行列には少年たちも加わっている。ときには数本のみじかい鎖のついたみじかい棒をもち、それで自からの肩を打ちつつ行進する。もちろんたちまち皮膚は破れ、血はにじんでくる。いうまでもなくクリストの記すような短刀で傷つけることや、こうした鎖のような責道具を用いることは、いずれも苦しんで世を去った教祖の死を思いつつ、宗教的な陶醉に入る手段にほかならない。こうしたことはカトリック教徒の一部にも、今も見られることであり、同じく自からの手で身に痛苦を与えることによって、十字架にかかった主キリストを偲ぼうというものである。かつて日本に伝えられた切支丹教徒たちも、またこの種の痛苦を与える道具を用いていたことは、当時の文献、或いは遺物によってよく知られている。

さてシーア派が国教であるイランの場合では、このモハラムの10日目は休日である。ラジオもこの前後は娯楽番組はひとつもなく、全部説教ばかりとなる。もちろん全国の官庁は休むし、すでにその2、3日前から多くの店は戸を閉じてしまうので、旅行者は食事などに困ることが多い。またこの期間は全国がそうした熱狂的な空気にみたまされているので、異教徒、外国人を見る眼はことにきびしく、些細なことから思わぬトラブルを起すことがあるので、外人旅行者は慎重な行動を必要とする。モスクへの出入や、写真の撮影などはほとんど不可能といってよい。筆者もヤズドにおいてモハラムに入って数日目に、用意されていた大きな山車を撮影して投石され、警察からも注意を受けたことがある。なお今日ではイランの官憲筋では、身体を傷つけたり、短刀を使ったりすることはきびしく禁止している。しかし群集によって昂揚された宗教的熱狂のなかでは、しばしばクリストの記すような血なまぐさい祭儀も行われるという。